

審査の結果の要旨

氏名 重山 陽一郎

「景観デザイン（土木分野で主に「美」を対象としたデザイン）」は、まだ若い分野であり景観デザインを担う人材は全く不足している。しかし、そのような人材を育成する方法は未だ確立されておらず、そのレベルは他の領域よりも明らかに低い。本論文は現状の景観デザイン教育を検証し、改良を加えて、あらたな景観デザイン教育のあり方を提案したものである。検証方法は建築デザイン教育に関する調査と土木との比較、および筆者による教育実践と評価である。教育に関する既往研究が極めて乏しいなかで、経験のみならず詳細な調査と論理に基づいて景観デザイン教育のあり方を具体的に提案している点は、本研究の優れた特徴である。第1章では、上記の内容を論文の背景と目的、研究の枠組みとして述べている。

第2章では、優れた建築家（様々な建築賞の受賞歴を持つ建築家）346人の学歴・職歴を調査している。その結果、優秀な建築家は、その学歴・職歴に大きな共通点や特徴、偏りがあることが明らかとなっている。ある学歴・職歴のパターンに沿って修行することは、優れた建築家になるための必要条件であり、建築家の独学や偶然だけで優れた建築家が生まれるのではない。このような結論が数量的な調査に基づいて検証されたのは初めてであり、教育研究のための基礎的事実として価値の高い成果である。

第3章では、優れた建築家へのインタビューにより、大学以前、大学、職場での教育の内容や重要性について調査している。その結果、職場での実務教育が極めて重要であり職場が建築スクールとなっていること、大学は建築の基礎や雰囲気を学ぶとともに人脈を築く場となっていること、大学以前の教育は建築家を志すきっかけを与え才能を芽生えさせていることなどが明らかとなっている。建築家に対するインタビューは文献にも見られるが、デザイン教育という観点で整理・考察したものは本論文が初めてであり、その成果は高く評価できる。また、大学や職場での教育内容についても多くの知見を得ており、これらは景観デザイン教育のありかたを検証する上で価値の高い成果となっている。

第4章では、優れた建築家を多数輩出する大学とそうでない大学を、教員とカリキュラムについて調査・比較している。その結果、優れた建築家を多数輩出する大学では設計演習に非常に多くの時間を割いていること、また、多くの才能豊かなプロフェッサーアーキテクトが教育に関わっており、その存在が極めて重要であることが明らかとなっている。このような比較調査は既往

研究には全く見ることができず、また、景観デザイン教育のありかたを検討する上でも注目すべき成果である。

第5章では、建築デザインの評価基準の特徴と課題について論じている。本論文は建築デザイン教育から多くのことを学ぼうとしているが、建築デザイン教育と、その成果としての現実の建築物やまちなみを無批判に肯定しているわけではなく、そこから何を学び、何を改良すべきかを調査している。調査内容は、日本建築学会賞（作品）の受賞理由であり、そこから建築デザインの評価基準を論じている。調査の結果、建築デザインの評価基準は新規性やオリジナリティーを極めて重視しており、耐久性や使いやすさなどが軽視される場合があることや、評価が建築関係者のみで行われており第三者的な視点がなく閉鎖的であることなどが明らかとなっている。このような調査はこれまでに例のないものであり、景観デザイン教育のありかたを考察する上でも有用性が高く、重要な成果と認められる。

第6章では、「結論 1：建築デザイン教育の特徴と課題」として、第2章から第5章までに得られた知見をまとめている。

第7章では、建築デザインの評価基準と、従来の土木デザインや景観デザインの評価基準の相違について論じている。まず第5章と同様に、土木学会田中賞と土木学会景観デザイン賞の受賞理由を調査している。次に、日本建築学会賞（作品）や土木学会田中賞の受賞作品を現地調査し、それらのデザインの特徴を調査した上で、それぞれの評価基準について論じている。その結果、建築デザインや従来の土木デザインでは部分的に優れた点があれば難点を見逃す傾向にあるが、景観デザインではトータリティーを重視していることが明らかにされている。このような評価基準の相違はそれぞれの教育に強く関連していると考えられ、今後の景観デザイン教育のありかたを考える上で重要な知見であると評価できる。

第8章では、「結論 2：景観デザイン教育のありかた」として、これまでの研究成果をまとめ、あらたな景観デザイン教育のありかたを、教育目標や内容、教育方法、教員、学生、環境と設備などについて具体的に提言している。

第9章は、著者による教育実践の報告である。第8章の提言の多くは、既に著者によって大学教育の中で実践されており、また、実践を通して教育を評価しフィードバックするという繰り返しが第8章の成果となっている。このように教育実践に基づいた提言は、本論文の成果をより実用的なものとしており、高く評価することができる。

以上概観したように、本研究の最も評価すべき点は、これまでほとんど研究されてこなかった景観デザイン教育という分野において、経験のみならず詳細な調査に基づいて論理的に考察し、あらたな教育のありかたを提案している点にある。また、従来の教育を他分野の教育の参照によって検証・改良するというアプローチは、これまでの研究には見られない独自性の高いものである。よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。